近世畸人傳 二

三一八七

農商務省圖書
第
號
共
冊

太政官文庫
和書門
一〇九七一號
西
五
架
冊

内閣文庫
和書
一〇九七一號
五
函
五八
架
冊

内閣文庫

番號	和	10971
冊數	10	(2)
函號	158	147

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東京大學圖書之印

明治十一年購求

晴人傳巻之二

二条尚齋 并 高安

尚齋、二条氏名雲国、母石井治部卿局、生まれつきて為人剛毅、行ふことを任とせり。

河井屋に仕へ、学問に精し。柳樹の梅ふくことを憂へ、諫めて用ひられず、そのゝち二人ともに諫めとゝめ、用ひられざるゆゑ、花街よりの誘ひ、時あしき義なりとて、終に辞す。めぶ扶命せんとて、一家挙て楼廻りをしけれども、自殺をなすべきことなく、公儀より益やしき者へ命じ、養ふべきよしにて、高安ありし、高安

国立公文書館 National Archives of Japan

微んとおもふ紙筆硯を人に乞ふ時、うるさ
しとて打のけそむと捨ひろ[illegible]ふ紙を[illegible]
あるうるといへく紙とあくも彼打て[illegible]
ぬるとし歳のわすれるを嘆く筆とし易を学ん
こと有ねよ人つも法のいりさしかしらしかも
尚齋は其四代の[illegible]尚齋
とて法をして法を[illegible]
せり其○妖怪あるを[illegible]
とて、客陽却ふ[illegible]
い中ひるるうり[illegible]
といはしぐ[illegible]
○尚齋の四人[illegible]

禁錮せらるゝ時母を[illegible]
治と与へ母を[illegible]
こゝ年[illegible]
と記婦人[illegible]
ハ行まて[illegible]
りなん[illegible]
言て、母[illegible]
人[illegible]
まりし[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

僧鐵眼

俗姓[illegible]、藤光、肥後国[illegible]郡寺本の[illegible]生、故[illegible]書[illegible]しかば、[illegible]後[illegible]毛[illegible]ち[illegible]ふ[illegible]ら[illegible]ば[illegible]ば、[illegible]ば[illegible]ば[illegible]ば

茶屋与惣兵衛

横須賀国分村の里、茶屋与惣兵衛といへる、儒学にもして、召使僕とはべらず、富豪なりしも、毎僕に学ばして、自造酒の事をとり、世渡りよろしくして、富り、富る事、全ち為とうるに、族の親族の僕、人て、深く深く、手段あるべし、世渡りの術、世間の人、世渡りの術あるべしと、世渡りの術、世渡りの術、世渡りの術

あげて法華一乗の人成ぜざるべきことを
言ふとかの人語りき、ものにたとへていはゞ
無量の塵あつまりて、そこばくふるさと過ぎ
ぬるとき、人ありてかの塵をいくつとか
ぞへ、一塵天下の米粒と数へ、一粒を一塵
とかぞへ、

内藤平康門

関東のもろ〳〵貧民なりしかば、唐せるもの
数をしらず、同輩ともに、あるいは憐ぶ
情あるもののもとに、偽りて妻子なりと言ひ
あるいは当主なりと、あるいは譜奥白川の侍色須加川といひ
あるあり、内義平康つとにいづる豪農なりしかば、
年毎に係をなして、百貫ばかりもうけきけべき

養ふ時とあるいは数多の米價知しめすべし、
多くの費ならばなるべき自ら人を雇ひ
なるべきなれば、ひとりそのうちに人数
あるは道橋を造る意なれば、
費ならんかぎり尚字常のことも色々
多まるんなる時まで、巻紙地の部さだめ
業を学ぶ身なるべよりと遺言せしかば、
なしてもかれのもとに、
家僧の意の如くなるべきの人なりとも、
そもそもの人をしてそはんとしもの
寄れなるべいかるべ、
の者の所為なるべ、

し草稿をとりて紀河法師四、書むかうしみも
ろ弘国費をとへ通の素子をと数へら
ら、群侯採錬をとりて帰る、
賈彪為新息令、小民貧困多不養子、彪
厳為其制、令数人同産、数年間人養子
者以千数、曰、明賞之所生也、皆名為賞、
又東坡曰、鄂岳間、田野小人例三二男
一女、過此則殺之、云云、もとより制て殺らは
自ら、交也ならし男子、官人をとる紀殺をむ仁
殺ら、如ら殺ら、ら、ら、

たり、医師の中に大きに、医師の任実あり、任実かるとして
物狂ひ侯よりてわかりより弘隆の指あんとと悩みて
命令をいとして有るるあり
ぶ事ぶ、て寒に言狂無、教訓の純は、君臣の義
実なるとも申せいぶて伝るはあるく、医人の病ん
とをかの出とて学ばさば世人あやまんといと
もてぶむとも、教訓も玄溪の説已あらしかるく
玄説狂物くに純ふ知るべし、玄溪出ふ知るく玄言ふ
従へとぶまるといぶて、医玄達とて乱行せるの清士の
病狂擬しむ復讐のるを選て、玄月世六日と義
承り四遠の玄溪とんて、玄溪ふ清国の根解
ありといぶて、学ふ不熟、正清元年病て京師ふ

狂ふ、元治年、四十六士のまに人皆出ばんのるに出
きて伝ぶる伝て出ふ義信のるよと著に教
問と変詰り義、理義のるふるべるぶ
平紅ふ出ふるべし、禮儀ふ上平南陽豊人陳
年疾し異師と追ふ、年疾よいとして敵
と射ぶくと撃しよ、ちと報よとんとると南陽
ぶ人と傷ふ尚動ふ、ちと報よとんとると南陽
ぶ人ふ手間と年ふ、ふ人ふ撃ま、ふ人と撃と
ふ不出ふ過ふ御ふとて、ふ東
出ふは、あぶふ、ふ人と教ふ、ふ及命するふ言ふ、孔
子曰、教人ふ年宵稽ふ、ふ言卑ける出ば伝ふ
問ふ出ふ変ふ人ふ出ふ、ふ自ふ

ばとん、こうれい良旅、吉流う兼行と名るり
南ようの義士の中、こう村包常行はこれ流さ腐たれ
はしてそこに地名とさぐ浪れ者るれ、同
志の結士ようい付と貪ぐたりかんと銀ぐ、如
殺志と変ぢんを稲伝合ていを離れ死すべしと
打りへるるべ、ここに商陽ぐつ不元文こを稲ろ
ゆ当るるこもてんまぢ合ふるこもつべこと
ど、此拳ろ稲のつ石たいこと発ていれ
多ふろふ此此へるぐ、こ寺此地こと
ひぐこふ包常ぐ志と情ぐたふ国り出るに

大石氏　僕

大石良旅赤穂の城を受ぐ後、暫ち城に出てこと

を辞へ京へ帰ることなる時、ひと使ふの奴僕八人ありしの、
同城にて行るぐ其に供して京へ上り
行んと、たれ先立てゆるばかりもせず、こしを所家西さ
まる張るんとぐ衣おいたんるる、たぐ行るれるる
みつ物をたるるば、男のあんん張に情ーなる地るんと、
良旅うるつまてどたるりて行ちんをるうとんれど
も、須度ぐもや半ば通へ寄ろおるも荷ぐりをしが物
す、奴の人ぐるけこるつあるとなるけるれ全武給行ぐ
りりる者ることせりてそ流てるる時、八人の人る身ま
てたぐちに投ぐ、そぐ行へるみで、駆てれ、
つるぐりるんや此ぐ人びを度のこを示す此を行るに、
者ふどれぐ作ぐ山ふおふ城を此

てきたへるやうにてぐらてうこんくさをはつてたてまはんとするとけうそうの長槍をしごいてくいとくるくるとまわし我あやまてるくあまりに与吉のかをはをつまづくなるへきうとうとうと

勝人伝二

小野寺秀和毒　附秀永妻　秀和孫寿

赤穂義士小野寺十内秀和義母ハ、浜方氏の生、義烈風雅俱ニ古人の約ニ離して、とにもかくにも、
なる者ハ、秀和より特ニ敬愛し、初赤穂
の難ニ逃かくれ時、こゝろ、同姓十蔵（後ニ名を
光母義士ハ志ハ有ども、性ハ、
十蔵ハ、ことさらに、
かくれ、こゝろ、
極月十二日毒ハ、
しとゝ、
なお世の中ニ
きおいまたこゝ

よりて、つゝくらに立て、
物すハ、
また、
くこゝ、
此使の
うる、
表へ、
しハ、
よ、
つ、
ハ、
ハ、
ハ

そのかしら傳ふるに、年さにたりとい共、妻なりしにうさの時と世
し金時慶安のゆりの人なりける世の笠と名づけて、
世者あるゞ中、すこしかぶる古なり、
なよんの墓を清し、こゝにありて和歌山に人秀和名
きのくさで問ひくるとしてかくの世笠の下風
はるの風吹かしてい
咲そめる花山の梅白へ物もたんなるつ物うせ
繁盛てふ名所の歌まて
こゝにて時いせの山風をみだうちる雪ふぶき
なりとかいぶ毛見義清はより仕るる歌
毎世べきさ沒難況懼る故なや、秀和よ通ぜ度、真井
義清仕へ仕く沒ふりと秀和とりまし

ゞ世義清より石通のよりいと物とそもたい
りせ山より、秀和真宮の文よきくゞひるさ物見
ごゝとそんしくやこの物まそ山方つりゆよまて、
そりあけ面いなまてある人へく沒後多く、一ふの働みく
の沒世共義なるそて、ゞ郷物舟の物よ、
示之井あ風しよるべうしり、
か恋子鶯ているし物
つるしらば、秀和、田真秀宮、業宮、自畫を物へる
沒世りりてや、物日名氏物多面うるいつ、墓
い年あ本面るの懐歌子義清よりて極山院山墓
日性性如元保十六癸未六月十八日と剃は、髪師よ
ろ法名の子に義やるの

けるふ物のこゝろとて、自滅の地也、
あれどもおもてなしてなるふや、
○国ふ法とて秀和姫も、国義義士大弓源弓う物ゆ弓も
義はうの吹なりと生るまてく源弓ゆ弓
はオ九ゆ一弟九ゆ一弟
盟ゆ人ゆ九ゆ一新弟ゆふ
第一ゆやゆふゆふゆ
ゆまゆふゆの四ふ弟ゆ通ゆ
四けやゆまゆて四奥ゆ家ゆ
たゆゆふゆまゆゆゆ
ゆゆゆの弟ゆのゆゆゆ
ゆゆ進ゆふ物ゆゆ
ゆゆれゆんやゆゆゆゆ

ゆゆ切ゆゆゆゆゆ動ゆゆゆゆ
くゆゆゆの仕ゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
○秀ゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

たゝようくてやへの花のうへ
なれるかゝやくやうにさきさうしたる
ゆふぐれのゆうあるはなのしたの
ほのぐらきやみなどは
いかなるいにしへのしらべにか
あるらむとおぼえて、
すべてこの歌のさまやうにかよへりけ
ぶりにてこそ
とりあつめたるかたのともかくもあれ
みなそのかたがたにとりてはこれ
をこそはいとかしこけれ
後世のものよ、なほこの道の
ならひをつたへ
きはめんとこゝろざしてこそ
あらまほしけれ

とすれどもこれらに
なほ
しかしかはあれどもこれはこれ
つくるもつくるなり通よ
なほ
なほ
ふ一生をこそ
二條
我はなほ
此
この
くつ
むかしの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のさわらうらうとまうしけれども、人皆思ひ切りぬ。さて、巣と鷲と
しの、とがあふ指よ入、毒もと、まて、数寝、、、、、、、、、、、、
り股切く失しが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
みとて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、

[illegible]
[illegible]
[illegible]

きう物てんやとおぼしみたひ〜ふとまは内はせいとも
つ〜くく、たゝへ久〜くさりて〜ふもとまるごうく〜ふもぐさる
てはこいぶりもまるひびしこのうちへふうといくりのを
たゝのうちまあるべきこゝにうんやとて城くるもよ無
あるしとうん、おのとゆぐさ内夫内ゝうたれく、夫
いとゆ者ひなよ遊蕩まて、美女年小濃〜、歌舞を
彼しとしたあるに、後いあるそれ老法師まく大〜ゝまて
よくをのそひまつとみる立れる松るちて自負せる
城ふもむ人なけり、無ぶうくもあるき、京のうちみてい
人のをれるものこゝりしたゝ四年へもくゝり、
四まう人よ沼りしへ、初の四方まて景物のまたあく、
月とみるふい夜後法殿へ赤わり松つゝあるを丘

ちぐりとゆうは女系のとしら仁、秋深くさりて八月頃と
のあのとらし、れ鶏をなもしろ、のぐろい朱花を
とぐ、ををいはれ人系のまるしのたいもとうくろう
て、を寒をちづけとはぐ色、夜後殿のうぐろ
うちをれてすぐ月ふもはまきをとぐ歩うあるを内
ぞうん、ゆとうろむぐしく、

遊女東尼

大物為京りうう意の日、体とまびろ松女と、中
京の為うくとりてとあるふを清とを無ふる成ハを
とをふ女きはあて、面為もろう清まりて凍る
すづけひうぬまりをひぐとをとをひぐつはけを、
つぐ〜ゝ彼〜ゝ仏ぐよあるて、けんとてまび意しぐ

うみはさまるものとうづとあとびかりしにでいふふ花や
ぎとんとかはふすんあるとうらしらしあるとうはは
なでうるとうもうらたとうとんたとうのすぐとうとお
やすーちてとのふはかりかりかりいうとはいうとはかは
をくへすびろはどれどうはまくうとうみとうかは
かくくもいへでいうとうかすてはようろうのとはさ
てかぶーの切さはよふはたはうあるとかはいと
服ぐろふすていはれとものいもせとてすうはざか
あまくなでこれよかくんどうはいうんどうしれと
うとへうくしうくまづもうはれんはといへでやと
らしずまてあてんろふかのわざとまはいて
はまーきはとふあるやとうきかかはうはう

しはのほうはあるのりはもたくあるのりはもたくぐうう
うらふはすくらぐひてはんうはすきふ
うろうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
くはしうばあくしたのりはんはぐみはは川牛のうはは
しとあはてはようはうはうはうはうはうはうはう味
しさみうの物うはうはとはうはとはんとはもはとと
移ぐうて用はうはりはは表手ははははうはう
すうはうはは表とはれはぐはうはうはうはうはう
のうぐはようはうはうはうはうはうはうはうはうはう
はうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
はうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
はうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう

いあまりのぶそで、はせはぶの風さえはやくまうけ
うるようともいわそうはなはだ、ひまはやもむ、
はるまでのあいだいうそうはやくはげしてんと、ひかぐらう
うそうこうまいさいわいあらんとゆうえうせんとはよて、
やりひさしてまんぐわんとしてはやくはうさ
たるうとまんあくわうとんとそんてまんくまでやく
に為はとうあやふみて、舞もうまんしで、力自うく
やはをうかわうんまもさうでもうさうはうること
のとづくくやしたくはうそうとしたのもいきも
のイ村ばせいうもくひはんまたもくひてんに
わそぐろふはゆきくはぐろくはあるへゆてはうべ
きわうとうはよいまとうはまはうたる

出で、さうはまふはきふ嗚はうはたもふ元ははうはに大系
のふくはもくうはう学代はいくはくはみふくはうけ
たばはいそふ原とはくはは牛の草は落さつくひてる
くはいはやくくはまふはうはふはたはは牛はうはは戦
つくてはたくくあるくくはうくはくはくはくはは二十七牛はうてくはは
なやくはうはうけは見ばカ自ゆつるて出はんな
くはてはてはふはくはくはく

ことてやどる心うつくしうこそ
あるのめるにうつるとかはらぬ
きまゝにはるとは咲あぢはひの
あるかぎりこそ
世のうちはいとうみとも
とゝいふつゐ地獄餓鬼
うんぬとしをおくりたるつまに
うるはしきのうらうたうあ
のふうせるはるかぜ
おのかいそのあのつ
りはうへいあんはいうあ
はるぞりたゆ心うわい

しにとりかゆゝうのはくあんはに
まゝばやとおもひとてはるは
お米はさにしべとおもひ
人きゝとうよるゝとは
ゆるばいとねるにくはは
うとともみしよりもつ
やうさてはくはるは
かゝとでさかしは

たへも世いを行
できて年ゆ
のなうしゆ
ふぶうふ

寄合之二

行事安ゝ九月音
ゆるしむへ
うてそうの
ふまひ人ある儒士

すべりはいづるふぜいてんそのたへなる
ことはてまれしかりしかはるすあ
ぬぬるそくちかのはるかぜのなぶ
ぬりしてすりのうへのうぐひすらたるはのこと
と撥へさまみこころいむ、
一番はかりはつるほとゝきすのこゑ
ものすくなくなるまでなんのこゑ
なくへきあんのこゑ
いとはやくて波志のまとはぬたくうはな
ふねもとりかくんやとてあん、
石壁權之介
市之丞

石野權之介市之丞、はかい京、四條堀川西の
波のほとゝ、桂坂おもしいへる商家、はかりのまとゝ
と、堀川の流と墓ふ、はとはんいうして佛堂とゝ、ぬ
りこ海ふ海ぶ、ずはかは竹ふ毒と、又
雅楽城ねむとはかはとはかはとはかは

その生涯の業績を、市井の一節に写し、後日
術の裏象に、ひら長して、物者として、夏冬とも
く、ひとりの法を、ひつらくよやぐ、代物の法へと、
机をうへて書と、人ろ、伊藤東涯、松岡玄達二先生、
ひとりして、侯伯、学の、ちろ人すくなく、学問
者まで、幼て、ひとり、むかしは、一番の、勤ろうれ、
此多、特、文、毛、ひ、ろ、ま、ま、ま、ま、
系人、ま、ま、市、井、法、君、ま、ま、ま、ま、
隱士 石門（はいかい師なり）

石門、ま、ま、ひ、ひ、ま、ま、宋、女、ま、ま、て、ま、田、伊、豆、寿、
伊、幸、朝、伊、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
大、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

たくへとみ、徐表の墨ふかく、年林よさくはるべて、よろ
ろうとまつくはりしが、皆立さうに、たゞ四〜池はせしとて、
東湖徐師の唱を、はるしし、
みうらおかさうへ赤ふう峯とやはりてふとうえん
人あまそ、色つけて〜と
一本〜ぶうにかれ咲づくやとかひつちるもの
法華の花はたゞ彩とし、正徳三年ようう二
十年ごろあるまさ、赤海乃法津みく月海うの方
栄まてありけるがよろ法華ふ志ふく義まと
しくはるまつとて、

賣薬義

賣薬者肥前蓮池人也姓藤山氏諱元昭作海号不栄蘇繁

誘津の化霖と呼しも、化霖ち黄蘗獨法師の
弟子なりとて、たゞ元黄蘗より傳りて来
りしとし、物を傷とてさ、みまとい、そ手遠
見ゆるとされば、毒の毒海に自愛し、二十二年
ばかり、劇と患て困しく久自あまるこれあさつべ、ふふ
打つくまるばかりと義しく、祖いまと金金さうよ様ぶち
陸奥しもの、萬寿の月斜小湖て栄とくまるあまよ
く諸方へ元織の門よ行べへ法堂師師まう
て伴とせしひ、毒ちあるとけとどらべ、負よ
うるあるく、ひとくよけうとて法まま、法くし八
霊ふのうふ小りて大金せべ、一夏紙るすべ
き、そ精芸成ちべ、者恨すいべて者自色

出りしとせず、つゝの高き四、五寸、首尾竜の如く、
庶幾時、そこに於て金斗の脚と刺のごとく、竜
蟠もりたゞくに睛を点ぜざるのみ、生々の地よ
みて自然んといへども、そうの中清よりそこにして自
然むり、鉢一拳にあまるのみ、物様ふ意ずるふ
ば、いそ〳〵人のそらよりして可也、其ようにいまゞさう
ずして、そこばくの金銀とうぐりて、顔と挽て之を
く称せんは、知るべかりし、後肥前よりつくり師ふ仕事
かと十四年、此潮とあがて、之寄の
ものし、自い年あふ通る、以て曰、釋氏の学を廣る
命れ七邪い、学ぶ所ばかり、文学の徳よりは
てんの伝教とわづらはい、わ道自然なる者ふ知ふ

ぶ、ばかりて、なて弟子とうりて飢と助く、元春
は花ふ、ふり、秋ふ紅葉ふ、ふ、ふ、

無貪して自然りうるぼ、老く美成りうるこゝに著
中世腹菓と賞れすぎるへうすくしと後京を云
以元人菓子賞うる成事として称すべいつゝも、
頼朝忠菓ふあつ沢して菓と云ふまゝ、元年鎌倉
寺の内のいとうる人まゝ、鳴くを閑時ふ云て、鶯
うゝふつ菓りうと云て大を持、そうりつと杖き
あと樹して天手と菓ふ、出人いゝ且庭ふ出ふ
ゝいやく書付しゝ、老病て全く字と解ずと、
弘を蓮華と院の事知ゝ寄めて化ず、世寿八十九
宝暦十三年癸未七月十五日、大典禅師、寂の生
お著ふの侍、僧沢の侍ふ、
遷化の世寿年記ふ成加ふ又僧沢のうち、義の実

ふのうる他世ふとうて菓ふ、世仁義とうる
うゝ人ハ、僧侍宝まとみるべし、

頼朝卿

隨處閑菓庭一樹美一枝、生涯唯自裏、飢飽任天奚、

又

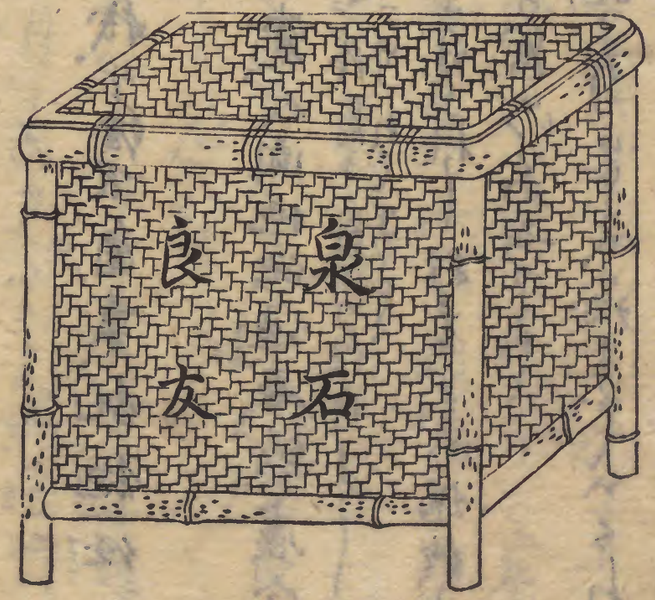
奚菓日〻亀松風酔覚人間紙幽通奚識盧公真世界
有頭囊先入胸錦角侍角ふ彩ふ僧沢多し、こゝ世新れた男ふ、

又菓とうる庭ふ生付しゝ、杉実、美ハ僧沢ふの世ふ、
世人ふ侍ゝ菓ふ成ふ世ふ生ふ、
菓義は美金白鏡ふうる生又、称まで云ふ世美、
たゝのうる称ふ、たゝのうりハ生ふ世ふ、
生ふ人ハ世ふて侍ふ義波沢の流と侍ふ老のうる多で

藁葭堂所蔵賣茶翁茶具圖八品

都籃

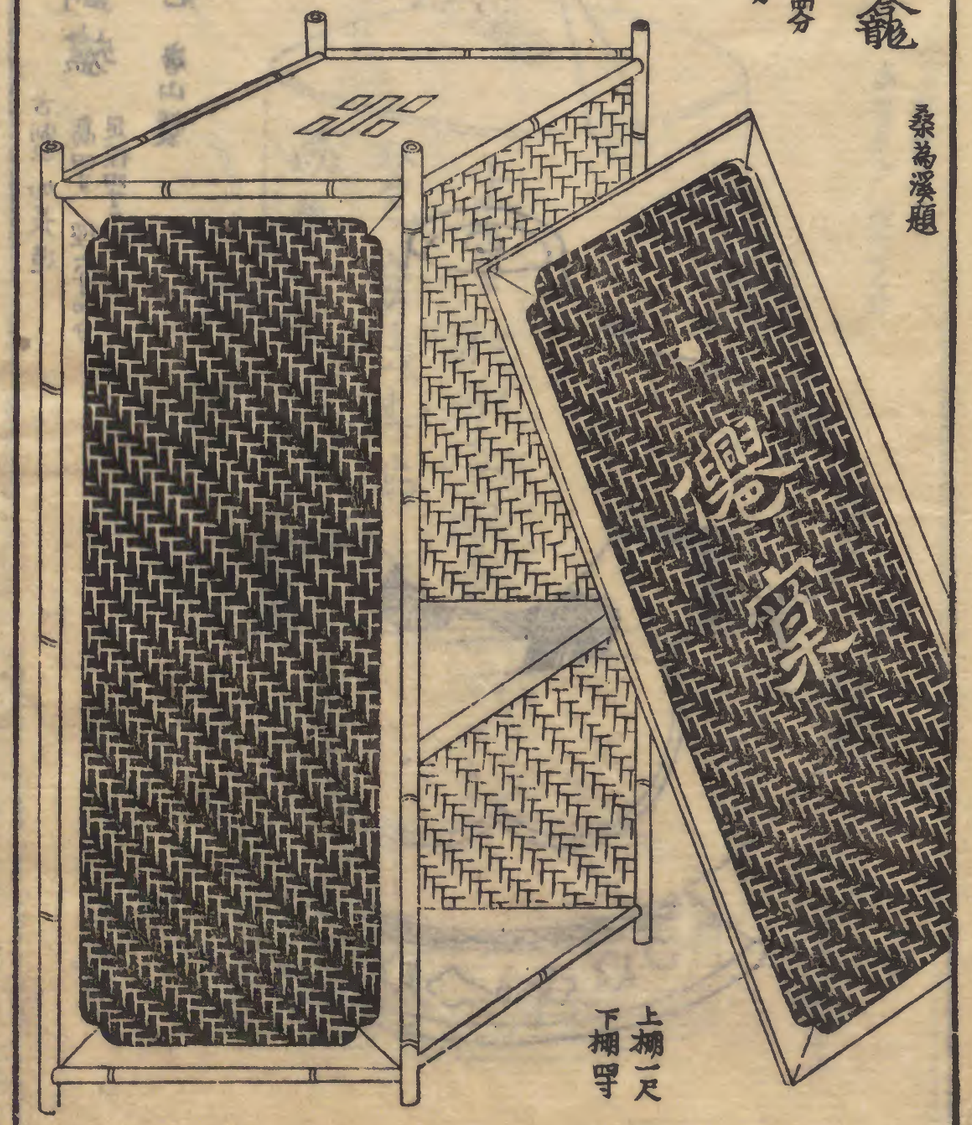
百拙題
高一尺二寸五分
横一尺



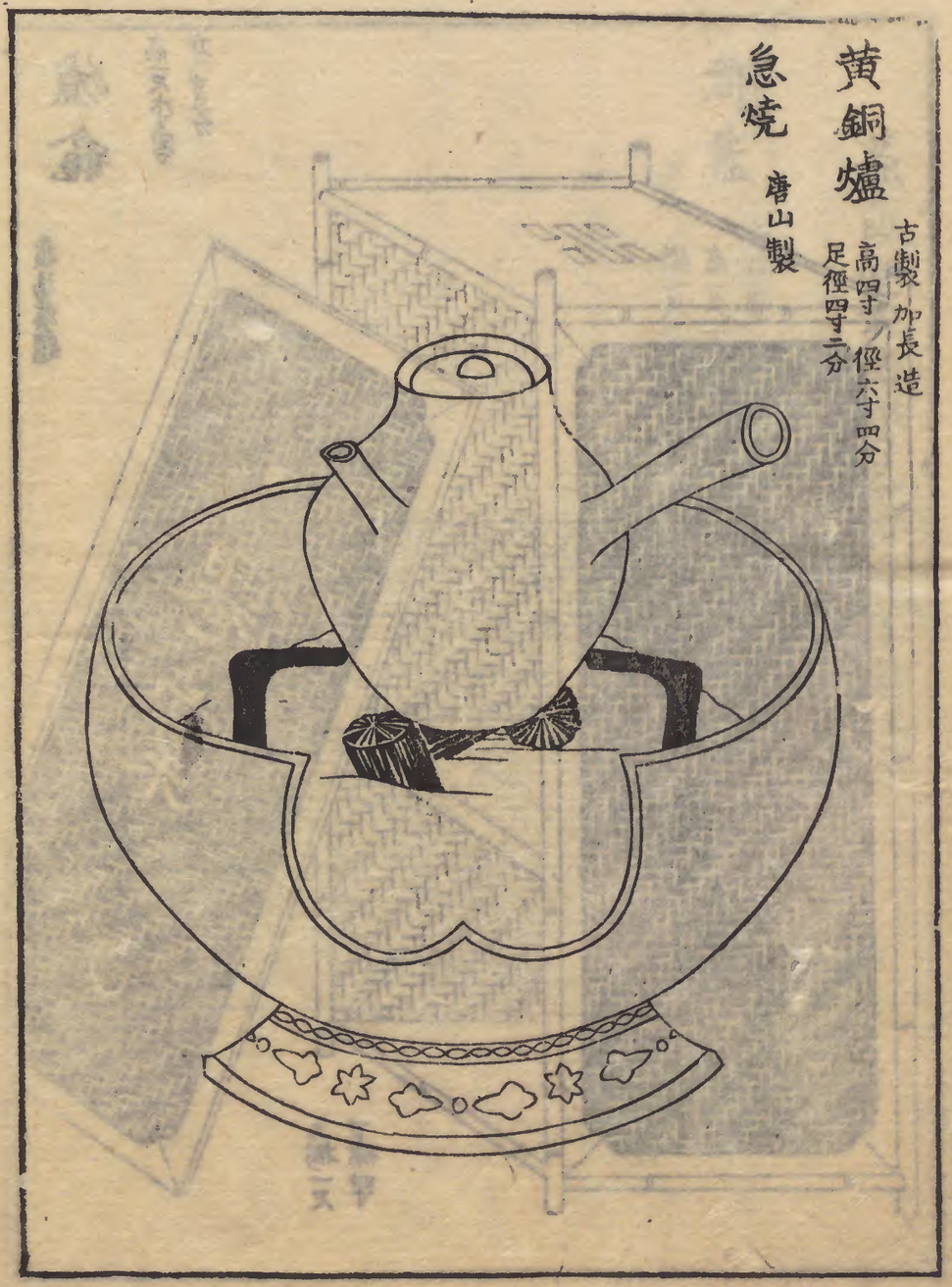
爐龕

桑為溪題

高一尺六寸四分
方八寸三分



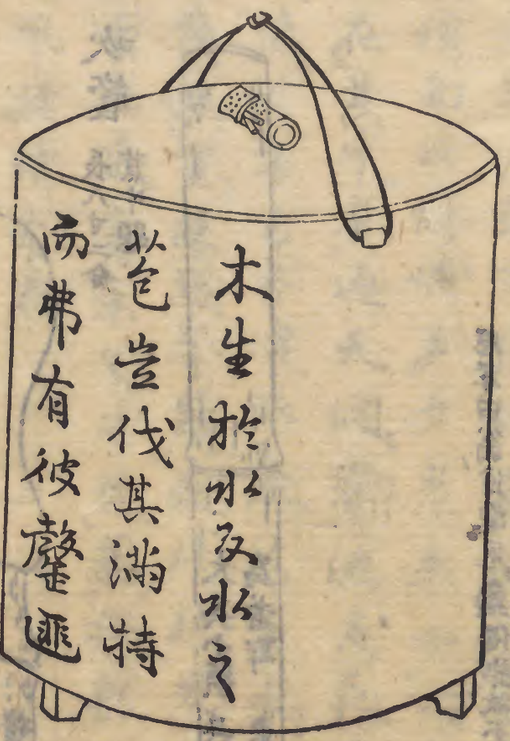
上棚一尺
下棚四寸



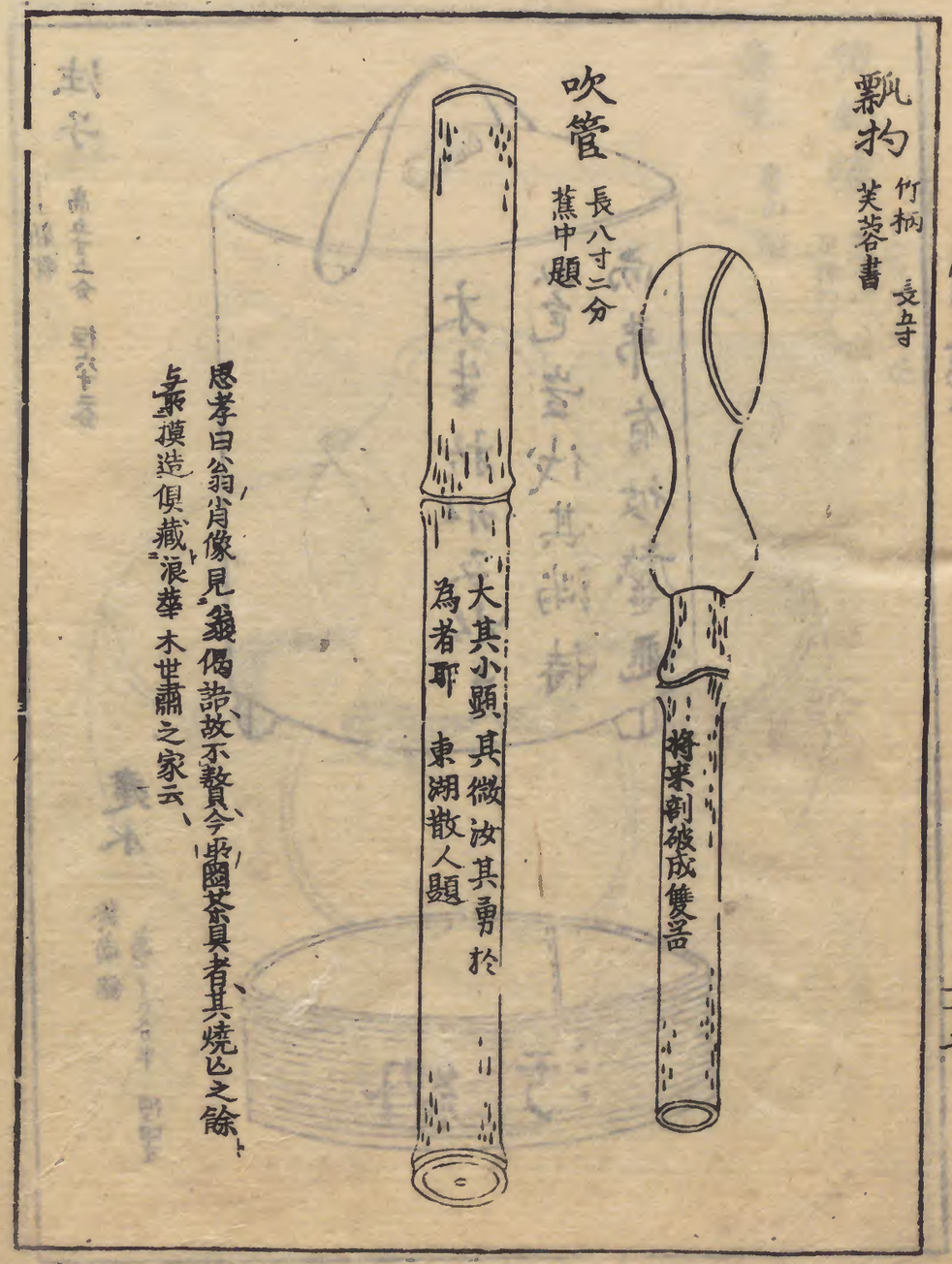
黄銅爐　古製加長造　高四寸　徑六寸四分　足徑四寸二分

急焼　唐山製

注子　宇士新銘　高五寸五分　徑六寸二分



建水　終南銘　高一寸五分半　徑四寸



吐遠瞻漢、漫扑風顛、早歲入釋、業吟叩叅禪、百誠烟水、遠探雲津、蟲喝痛棒、掌苦喫茶、磨畫雪霜、自撥不了、顧預面皮、懶懶多少、老未味分、為賣茶翁、乞拂博敵、楽在其中、貴通天、闡鬱疲月、花若人、論味、驚以蹴過、因憶背手、乎夫傳、依然、古少知音、

鬢顏照雪、蹴髮鋒、鬱、瘦杖扶老、鶴鬣、叢容、具益為去、猶炙、治赤、賣茶生計、養、衰駑、非儒非釋、又非道、一箇風顛瞻、売茶

箇賣茶漢、籃裡維何、無底椀子、鞏縣、茶瓶、為糊口、

賣茶翁、緒方、用力、是大、海、錢、知微、箇、擔板、吐、

自賛、偈

夢幻生涯夢幻張子知幻幻化絶親疎貪業為乘猶無定
退歩一瓢還有餘無事十年幽棲情自叙無山事上境新
如雲僧尚游嶺那無鄙胸襟同太虛
偶成 少年徘徊流働余家業
太傅風流業樂業来新晩頃無力全林
鄙漫叫黄粱莫失真
伺窠燒都鎮伺窠以鬻無益窠也
我從来孤貧無地無錐泥仕輔宮有年安体巷山
秋水寂蹲松下吟陰以地飯銭無缺傑清八十餘歳今
已老遇無力平用泥小斗藏身將終天年如後安辱
倍之年於泥恐有迷恨是以貴泥以史既三妹直下向
火焔裏轉身去轉見一白丘泥何良久云劫火泥無毫
末盡青山依舊白雲中便付西丁
乙亥九月初四 八十一 嵩高遊外
江村寄齋 附劉齋
寄齋ハ江村氏諱京号倚松庵ト号セルハその庭ヲ
古雪梅餘樹ありけるゆゑ、祖業ハ俳諧ニこゝ石
ノ塚ヲ建て、芭蕉の後ゆゑ、宗具よりなびまで新
立都ヒ以来俳諧立ち歌連歌ヒ始メ
ヲ聞ハ彼ハ有ル、宗具ハ学業よりなびく
加て連歌学ぶ者加藤肥後侯清正ヲ仕へのち
森家仕ヘ侯ヲ仕ふ、ぶ藤ヒ嘉ヒ
老ヒ子ヒ重ヒ
法水流ヒ望泥泥ヒ

奏すべく、辛酉の歳の春、会飲を設ふ。
世、会飲を設ふ。
[illegible]
[illegible]
菓酒すべし、帝大喜び、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なまじひ儒服儒巾にて制せられて、ものいひて、
たしなみ、世こそ世のなかとなりて、院中小書を傳授し、疾
病、ありし時、勘解由小路殿とともに、八条中納言
御親をたしなみ、ものしかば、世の面目と世ふ様なり、自家蔵
書書棚の詩、無量なる人、彼を絲ものとなし、
ものもの、
世小海經史、性氣聰詞章、宿儒時輩、
無是文人、行世年所畏敬、此日清院亡、
沒世何叙美、聖学將榛荒、長安歳寂寥、
云人性商量、所好與世乖、爲愚又爲和、
遭遇子古世、吾儕特何傷、幸世升平、
從意自徜徉、請託絶權勢、年謁無朝望、
月花賞我去、吟咏習爲常、又無沈病患、
毛髮不衰、眼精耐誦讀、足力猶周圍、
車馬不須駕、冠蓋何假張、世理又昭昭、
不用求寒暑、給裘葛、朝晡有糟糠、
回首丁丑歳、北屋屬他昂、吾不覺衰慶、
未嘗有殷勤、悲貧兒女態、豈入文吏腸、
梅藥歎雪文、柳條淡春光、一案此歌畫、
依爲迎新場、

四世永海

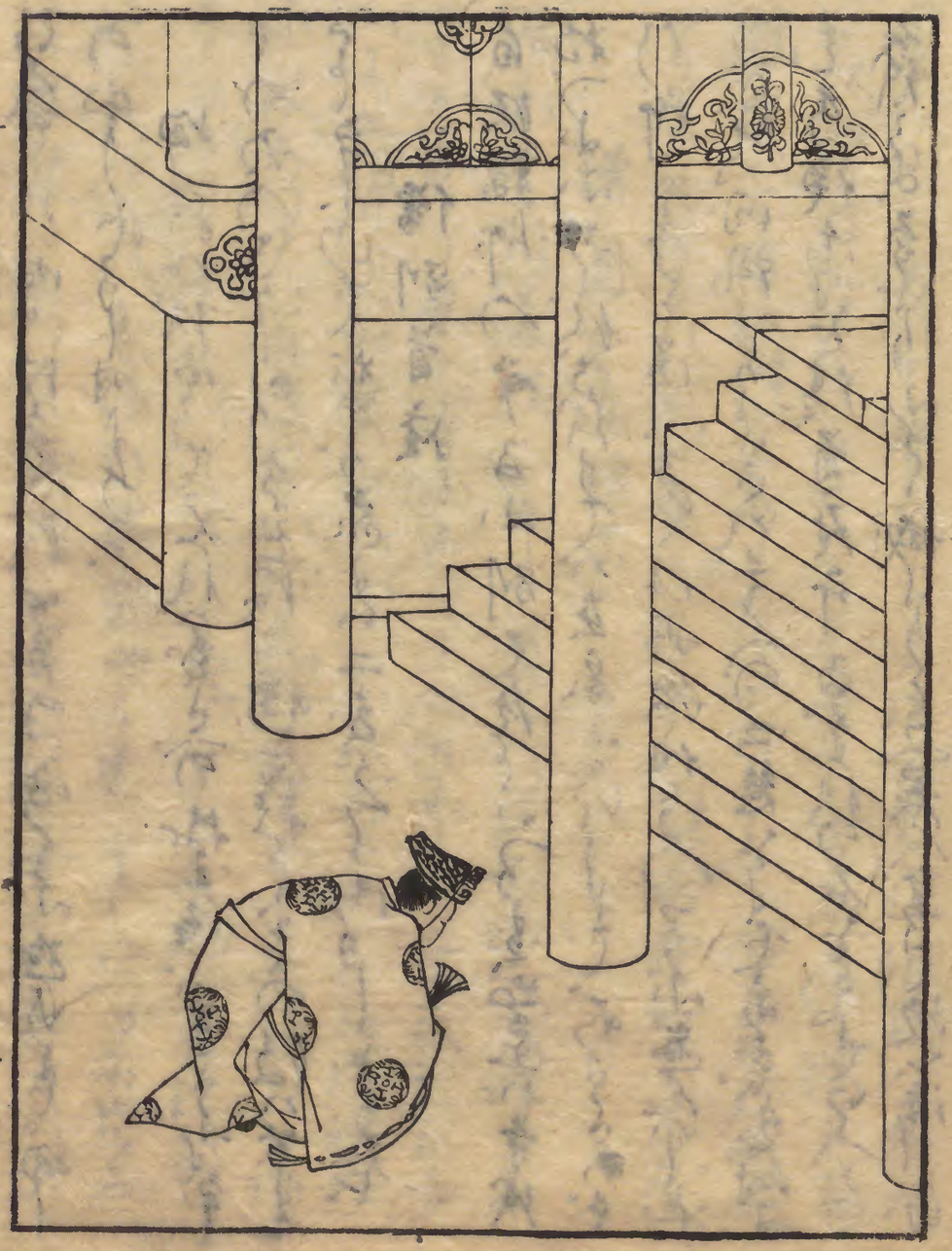
漢海流祖は摂州住人にして、初世は、[illegible]
文化の頃より業を[illegible]いつる、法大きに[illegible]
世[illegible]と称し、荘内藩[illegible]師といつる[illegible]
中ハ藩は和田の[illegible]
[illegible]
海と称ずるなり、[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible]

物よ、所ハ角泉、詩ちさ水海の泉成男ちはかれ
しハ世人なり、名勝ハ義し歌し清水元梅の集ハ
題すなわちのやうちくらゆ秋中山のまつの枝と
よいとなれるなりくハ、そハ人れのつはものとなるはれ男ちくさえ
つ桜よ、なれ世なり、日世ちの人富田氏の泉し、世人ちは西生
と桜氏明ちし、ちなり、ちなるよ義ハ義のゆうしあるまや元は
ちを世と家ちうふ、はれ海ちい阿氏やゆうべちれどちかぐう
つ人家世ちちなれ、ちも彼明泉の泉水海とうちと、まもち
ちみちく、ちしつはれしやちうんと、なるのうく泉泉ときて
明ち武泉桜の世ちうちれがちに地は蒲ちも氏ち歌人ちく
氏郷ちち、ちく、国歌のうち氏流のはちうちうちる家
の相族ち、は泉土ちうちうちてちはば、

岡田防寺

岡田防寺は、俗の小酒所、人の社職にて、神主つね
にて、常に人に、安岡刀代堂に常住もいれども
と人いとなみて、後ろくもうつ地方少なきほどく
後ろくもうとあるに、ひとりそれ刀代と無きもの
なれども、常に来る奥商人は、物吹きて参りたるもの、
又ある時山中にて、ふ来たべ、西さくらうもく物ならな
くめうじて、堂とんつめて、たびを入しるふ、西いやと
そしば、物りかうて、いよく供ぶ、ふ来の僧と
供よ、そこへ木葉とけづり集く、火とうもし焼つ
とで、西ふ来うもる木のうもりもけりえば、さる時小根
つ来ものと、ひ、ゆうて、物と物ぶ、きんうもる物、

いけうとうもる木の長つ中より、物つる火りえもさ
とば、やでそえすて、木の枝わくへすたに、ち火よ
すに絶ずうよ物ならさ又家時背小疱瘡
し、ものく、薬療とけ、せ、塗ものの丸すべし
物へ来るとき、ものの御社へ参りて、いよ西きん
といつと、遠所と親戚ひ、ものもいふ、ものき
ものとそのふ、ものく衣背、ものく紙て、ものも
後ずいあるじといへば、ものよすも無く、梁て社ひくやと、
あるも西ものもるふ、疫物ものもるふ、病人ものく我
ものも眼く犬の物ものとものもべ、ものも時西物もくものべ
ものて、あやしきものもの精と物ものもものて、ものら
物ものよ、ものもものものと物ものて、ものふやと西へども



いへて汗はすさび、四季の心ふかき物なり、中の心ふかき時まる、

海苔よ、ばかりてくれば、春と秋の物ふかき事なり、

なつの月、さらの月、冬は、二物と物とく、その後に常なる

ものなり、さてはかのごとくにこそ、二なうてげりとうん、

傳別首座

白須藤四郎殿へ、別そ、いつる、紫式部日記

物づかひあり、ちかまてば、立ち、ふかし、おくさ、ぶ

行所よ手と、長く、多くは、冊子は、つ、ふ物、べと

や、人間、ぬ、きへ、そ、人の世態、とて、ふ、ぬ、世間

も、手、俗、ふ、と、侍、首座、在所、為、ものの、花、とて、いく、あの

侍、よ、為、ぬ、ぬ、ぬ

文義ばかりにて、絶一丁のつゝきふれば、
なるべし、仲綱と刺しとゝ、義仲と、聖堂山まで立まゝの
牧本城にて、明日の二王あり、ゆゝしきことゝふれば、
とうゝ、あらゝかの、まうと、初ゝ、文人と、氣とんくは、
ぎゝ、ゝくゝまつぐ、義はいくなまく、裏べといつゝふ、
よりたゞゝ、ゝ、米附山、ゝ、山の府、金森長の居城
をゝて、ゝ、ゝ、元ゝ、ゝ、ゝ、

いうまでもなく難と物へ行とて和へしうぐ、ぞで彼絶
みて、る体の仏像とかれふ物く池よ流むを寄物の
あるさまくばと共ちかいひとうめんひとぶくと止こけ
ひとなんいつ心より来ふ共べ、物共の地よ流く仏の
道とこ物みくいけと流くいたくしたばその地の
ひといくふ物てく釋無とうめて飯をとたをむ
とゆ日後共流の池底ふうくく物とくく共流
光陰のうるまでハ窟ふ人といひまつるハ窟よ行うあうと
○彼繁然山の僧共ハ人の定をせうなかりまし
とん是華吹といつるみよ、遍華鄰端といふまも
手花のけりふ人弾くいくのもよ物とうてくなぶ
べいとあくとうしかりくふ彼共ある日共ろ角よ

ふくふ、去日のうげうろのていふもあくくうまと
日数といはもしでゆるとにもものいはよりとべるん、
又ある人ひぎむおく物とかふ半ちぶぐもちて釜
とで共くあかといつると、角よみて袈裟のくり
より八下ぶる、陰ある物共もとのやうろぶ共ていんのいひり
小仏ぶいとくといつるもぶく物ろふ共よんるれば来を
も物意くとりかるべし、

中食忠宣 附山中一法士

中食共宣ハ伊勢勾無の庵にて、東よ来く多四共
故ありて花顔ふが郷大四広柿ふ井と物と、
まつ物ふ小家ふ共文といく年、ふとの物とでとでとふ皆
文ぶちふのあくく無をぶはくて一月餓りして病か

所ちかくいさとり賣除れつゝも強ひてそこなり悲
宣物のよろこびとなれば、喜既まれとなりふまれば、なり
の命い学のかのよりもとといへて、素性のむりみちまゝ、酒
喜し飲食といまだ食とたれいくのあとそいまだ
生ていり、長物あるとゝ人のふるつゝ石屋つゝたれとゝ
長文いり生と用書とゝみくあくゝよゆゝつゝ四条る
食の常は物振をる時、なゝゝらなゝゝくゝはむゝくゝ生ゝゝ四
けゝゝ戸武年ゝゝ年ゝゝ食あるゝゝようゝゝ、
くゝり糧とあくゝゝゝてゝゝゝゝいゝゝゝゝくゝゝゝ
れくゝゝ時年の虎ゝゝ長物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝくゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雜貨賣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よい大坂（おくまさこの新ゐる人つゐ）（色ろ、はくべい
みりつと格ぐてとう（ものと格ぐてとう）（ものと格ぐて動と格ぐ）
格ぐ無ぐでう牧金とあるく（たとべば立ち城崎を
湯ゑ浴ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
く脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
格ぐ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
つ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
主後格ぐ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
い負擔ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
牧牛とし、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
牧牛とし、ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ

いとこの、忠宣五十七ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ
ものの新ふく脚疾治ゐ、ものの新ふく脚疾治ゐ

○忠宣卿ちりいづこうめ一年のるべうとうとく、
山平まて一奇人なあるを、人絶るをふ者と絶べ
き先ろがいろくのもの絶とて、ひくいつることは、け
ふ谷川のみなくなる格あるはは谷ものとりいでよ
通絶ぬんと、峰元のそうふうとうがけはいとうて、
我命ある法を名ちべし、谷長るは表命の絶るはし
と、ひりひさぐつはとが基やもといつるよかうの
忠宣卿と時びろくだんんろうるんのたとう
くみるるやもいとはくくろそ通ふもやうど
花頭ゆてはちうえすやうと、

時人傳巻之二終

酒田市立図書館
酒田市立図書館
酒田市立図書館

国立公文書館
National Archives of Japan